

---

# 小さいサンタ

notomo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小さいサンタ

### 【Nコード】

N66730

### 【作者名】

notomo

### 【あらすじ】

ひと足早いクリスマスストーリー。ちょっとおっちょこちょいだけど、一生懸命なサンタさん見習い。ぜひ、ご感想ください。皆さんの心が暖かくなりますように。

「小さいサンタ」

今年も、クリスマスがやってきました。リルと、おじいちゃんが、一番いそがしい季節です。

「今年は、ぼく一人で、いけるよ。おじいちゃんは、腰もよくな  
いし、僕に任せて」

リルは、サンタのおじいさんの孫。見習いサンタです。

「本当に、大丈夫かい？リルは、優しい心を持っておるから、サ  
ンタに向いておる。ただ、お前はなあ・・・」

「僕、今年は、猛勉強したんです。地図だって、読めます。」

サンタは、本来地図などなくとも、すいすいと全国を回れるので  
すが、リルは、方向音痴でした。そのことは、リルが一番知ってい  
て、その分、努力は惜しみませんでした。おじいさんも、リルの真  
剣な瞳を見て、今年は思い切って任せてみることにしました。

お仕事を任されたリルは大喜びで出発です。

大きな、プレゼントの詰まった袋を、トナカイさんにのせて、地図  
もしっかり持ちました。

リルは、順調にプレゼントを配っていきました。勉強の成果です。  
さて、最後は小さな島国です。プレゼントも後少し。リルは、トナ  
カイさんを公園につないで、袋をしょって出発しました。

みんなの幸せそうな寝顔を見るのが、リルは大好きでした。この  
国でも、眠っている子どもたちに、まちがわないようにプレゼント  
を配っていきます。

しかし、この国は、少し道が複雑でした。これは、さすがのリル  
も計算外です。全部配り終えたのはいいのですが、公園まで戻れな  
くなってしまったのです。

「地図を見ても・・・どうしよう、わからないよう」

早くしないと、夜が明けてしまいます。トナカイさんも心配して

いるに違いありません。リルは、泣きたくなってきました。肩をふるわせてると、ちゃんちゃんと、背中をつつかれました。振り返ると、リルより小さな女の子です。空き地で地図とにらめっこしていたリルは、本当にびっくりして、ベンチから落っこちてしまいました

「おどかしちゃって、ごめんね？あたし、ももっていろいろの。うちには、サンタさん来てくれたことないから、ここで待ってたの。あたしとパパ、ここに住んだり、移動したりしてて、お家ないの」

もも、と名乗った女の子は、この寒いのに、薄いＴシャツ一枚です。すぐくやせていて、でも、瞳はかがやいていました。リルは、お家がないこの分のプレゼントを持ってきていなかったことを心底後悔しました。

「ごめんね、僕は、サンタ見習いのリル

プレゼントは、もうないんだ。ぼくは、道をちゃんと覚えられないだめなサンタなんだ。がっかりさせちゃったね」

「ううん、そんなことない！ここで待ってよかった！だって、リルに出会えたこなんて、きつとももだけだよ。うれしいなあ」

ももは、リルの手を握りました。ももの手は凍えていて、冷たかったのですが、リルの心に温かさが満ちていきました。

「もも、地図見れるよ、いつもお父さんと移動してるから、そういうの、得意なの」

リルは、ももに地図を見せました。

「ここ、もも知ってるよ。送っていつてあげる」

なんて優しいこでしょう。リルは、ももと手をつないで、再び歩き始めました。

ももは、ごきげんで、リルにいろんな話をしてくれました。毎日ご飯を見つけるのに忙しくて、学校に行けないので、お友達がいなこと、お父さんは体が弱いけど、すごく優しいことなどなど。リルは、毎日天界の学校に通い、おいしいご飯を食べて、ぐっすり眠っていましたので、ももの話を聞いて、すぐくびっくりしました。

そして、ももに、どうしてもプレゼントをあげたくなつたのです  
もものおかげで、リルは無事公園に着くことができました。

「本当にありがとう。君のおかげで、サンタの国に帰れるよ。こ  
れ、プレゼント」

リルは、自分の着ていた、温かい赤いセーターを、ももにプレゼ  
ントしました。

「リル、寒いじゃない。ももは大丈夫だよ。こうやって、同じ年  
くらいのこと、しかもサンタさんといっぱいおしゃべりできたんだ  
もん、すごくうれしい。」

「もも、これをもらって。これをももが着てくれることが、僕の  
幸せなんだよ」

ももは、とても迷いましたが、受け取ることにしました。Ｔシャ  
ツのうえに着てみると、赤い色は、ももにとても似合っていました。  
リルは、ももに抱きついて、

「すごく似合ってるよ、似合うと思ったんだ。ももは、すごく  
優しいもの。僕も、ももに出会えて、幸せだった」

そして、ももに気づかれないうちに、小さな紙を、服のポケット  
に入れました。

「もも、リルのこと忘れないよ。リルも忘れないで。約束」

二人は、指切りしました。

リルは、トナカイに乗って、自分の国へと戻っていきました。も  
もは、リルの姿が見えなくなるまで、ずっと手を振っていました。

リルが無事帰ってきたので、サンタのおじいさんは、本当に安堵  
しました。そして、今回のリルの話を聞いて、

「わしからも、ももちゃんにおれいをせんといかんのう」

と言つて、きれいな粉を、ちょうどあの島国のあたりに振りまき  
ました

「おじいさん、何をしたのですか？」

「ふふふ、リルはもうお休み」

リルは、疲れきっていたので、眠り込んでしまいました。

ももは、リルが消えてしまったお空を見つめて、寂しさを感じながら、空き地に戻るところでした。歩いていると、ポケットのあたりがかさかさいいます。探ってみると、手紙でした。

「ずっと、友達」

ももにできた初めての友達は、サンタさん何てすてきなんでしょう。今年のクリスマスは、ももにとって、最上のものになりました。家に帰ると、サンタのおじいさんからのプレゼントが届いていました。ずっとうまく歩くことのできなかったお父さんの足がしつかりしていて、帰ってきたももを、しっかりと抱きしめてくれたのです。「もも、お父さん、もう大丈夫だ。体が、ほらこの通り。病気がふつとんじやったみたいだ。お仕事に行けるよ。ももにも、学校を探さないとな」

夢にまで見た学校に行けるのです。ももは、きっとリルのおかげだと思い、お空に向かって大きな声で、ありがとうを言いました。

学校に通い始めたももには、たくさんのお友達ができました。毎日元気に学校に通うももを、リルは、天界から見守っていました。リルは、もも以上に幸せを感じていました。そして、サンタのお勉強を、今まで以上にがんばるようになりました。今度のクリスマスには、もものおうちに一人で行けるように。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6673o/>

---

小さいサンタ

2010年11月2日22時07分発行